

## 赤井城址 宇佐市安心院町佐田

《立地》佐田の平野を望む、三方を谷で囲まれた標高 150mの台地上に立地する。台地平坦面は南北 200m、東西 70~40m程の細長いもので、その南端の最も幅の広い部分を利用して城郭を築いている。麓の集落との比較差は 50mである。山蔵川を挟んで東側の山には佐田城がある。直線で主郭まで約 1 kmである。

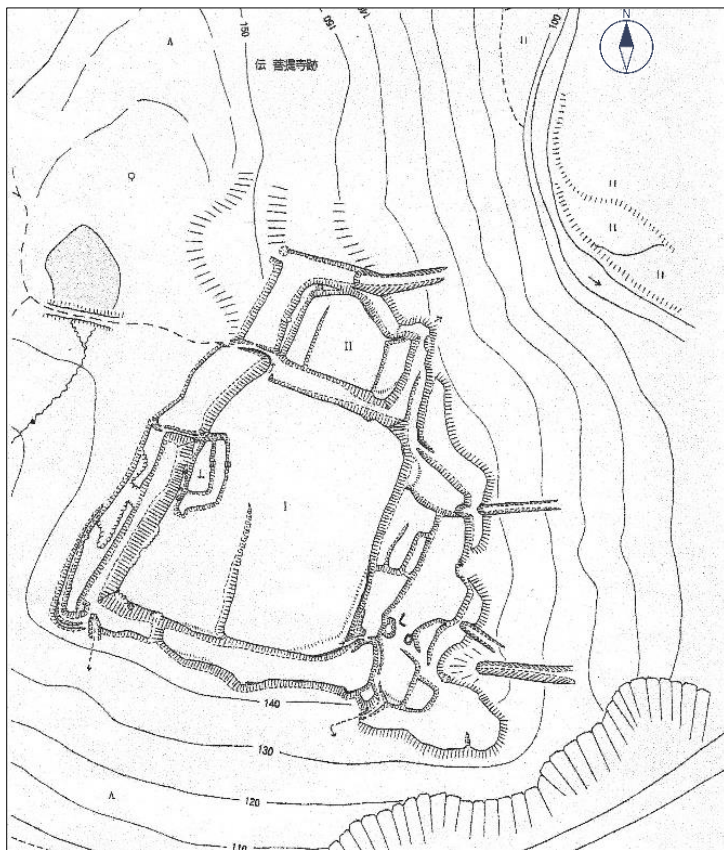
《現状》現在、城域はすべて山林（植林、雑木林、竹林）であるが、以前は畑地として利用されていたと思われる、改変が至るところで見られる。特に、斜面部の階段状の削平は城郭の遺構との区別が付きにくい部分がある。また、山の作業道が至るところに造られ、当初の城道の推定を困難にしている。さらに、平成 3 年の台風による風倒木も著しい。

なお、赤井城の尾根続きの北側は「菩提寺」の跡と言われており、井戸跡や石列が見られる平坦面がある。

《構造》台地先端部に南北 90m、東西 60~80mの台形の平地（Ⅰ）を作り、北と西は堀、南と東は切岸で画し、さらに北側の堀を共有して 30m×40mの第二の曲輪（第Ⅱ郭）を付設する。この曲輪の北側は堀切（+ 豎堀）で尾根を遮断している。主郭は、西辺中央の堀を望む部分に、幅 1 m程度の帯曲輪状の平地を巡らせる 20 m×5mの基壇状の高まりを有している（現状では戦国末期以降の佐田氏の墓地）。西側の横堀（堀底から主郭平坦面までは 8m近くある）は、その基壇状高まりに合わせるごとく、そこから北側には延びていないが、本来は第Ⅱ郭との間の横堀につながっていたと考えられる。

東側斜面には第Ⅱ郭の北側堀切から続く豎堀を入れて 4 本の豎堀が認められる。その豎堀の頭部の位置から考えて、不整形な削平段も城域として理解している。

《歴史》明応 7 年(1498)に大友親治が周防大内氏の宇佐郡代であった佐田氏を攻めた時、「菩提寺」に佐田俊景



が立て籠もった（文書番号 160 号）。菩提寺の伝承地は、赤井城の続きの北側であり、城と寺の関係はにわかには決しがたいが、ここが **佐田氏**（系図リンク）にとって「佐田古城」や「佐田山所々御陣」と言われる佐田城とともに重要な位置にあったことは間違いなからう。遺構から見ると、佐田城が山城から出発して、最終的に居住も可能な空間に改変されているのに対して、この赤井城は当初から居住を目的とした「館城」として整えられた可能性が高い。

（2004「大分の中世城館」第 4 集総論編、大分県教育委員会）

